



宿屋仇笑福亭志ん藏繪

へエ、一席伺ひますは、未だ道頓堀の日本橋邊に宿屋サンが澤山御座いました時代のお噂を聞いてぢやない讀んでいたゞきます。

旅籠商賣と申す物は仲々氣苦勞の多い商賣で、晝間は近所、隣と口の物を喰ひ合ふ様に、仲よく致して居りますが、夕方になりますと、商賣敵と申しますか、我れ一に好いお客様を引かんならんと云のふで、門前へ出ましてそれゞ喧しゆうお客様を呼んで居ります。

「へエ、あんさん方お泊りや御座りまへんか、萬屋金兵衛は手前の方で御座ります、へエ／＼、あんさんお泊りや御座りまへんか……ゴホン／＼（咳）……これ甚ふ家の中から煙が出て来るで、お客様

んを引かんならん時分に……ゴホン／＼何を仕て居るねん、そう燻べたらどもならん、早う燃しんか……へエ、あんさんお泊りや御座いまへんか……何、燃へん、そんな事があるかいな……何、割木から水が出る、宅は枯木ばつかり使ふてゐるのにそんな……あわてゝ牛蒡を燻べた、阿呆やなア、牛蒡が燃へるか……何、松明牛蒡は燃へる、理屈を云ひなはんな……へエ、あんさんお泊りや御座りまへんか……それ燃へたやろ、氣をつけんさかゐや……へエ、あんさんお泊りや御座りまへんか……ア、コレ、赤坊が帳場で筆を持てるがな、其處等中墨だらけや、早う筆を取りなはれ、ア、倒けて頭を打つた、お乳母どんは何をして居るねん、何んや白髪を抜いて居る、日暮の忙しいのにそんな事をせいでもえゝがな、早う乳を飲しなはれ……へエ、あんさんお泊りや御座りまへんか……」番頭は一人で喧しゆう云ふて居ります、處へお越になつたのが、歳の頃なら彼れ是れ四十餘りの立派なお武家様、頭は松鶴の様な水菜頭と違ひまして、大髻と云ふて大きな髪で、物に假令て申しますと、雪隠の屋根に琴箱を乗せたか、百貫目の陀羅助二つ折と云ふ、細玄服と申しまして月代の間へ指が二本這入りまへん、日頃の擊劍の稽古で面摩をして兩髪が禿上つて居ります。黒の五ツ紋附に、縞小倉の袴緋足袋に雪駄履き、長い刀を流儀に差し、腰に印籠胴籠と申しまして、熊の皮で造へた大きな袋この袋の中に世帶道具が一式這入つて御座ります、這入つて無い物は、井戸にヘツ、ヰに嫁さん、こんな物は這入りませんが、手に持て御座るのが鐵扇、親骨が南蠻鐵、子骨が鯨、ひろげると唐もろ